

## 通所施設における知的障害成人の行動障害と課題遂行に及ぼす

## 支援マニュアルの効果（1）

— 利用者の行動障害と課題遂行の変容を中心に —

○久保田 雅貴

村中 智彦

（長野県松本ろう学校）

（上越教育大学臨床・健康教育学系）

Key Words: 行動障害、支援マニュアル、知的障害

【目的】知的障害者通所施設（以下、施設）では、行動障害を示す利用者への支援が課題の一つである（服巻・野口・小林，2000）。行動障害に対する機能的アセスメント（functional assessment; FA）にもとづく支援計画の立案の有効性が多く報告されているが、職員の支援実行では担当職員の入れ替えが多く職員間の共通理解や情報共有、一貫した支援実行は困難となる（野口，2008）。本研究では、施設での日中活動の一つである自立課題において、職員間で支援内容や方法を共有するための「支援マニュアル」を活用し、利用者の行動障害と課題遂行、職員の支援行動に及ぼす効果を検討した。

【参加者】参加者（participant）P1 は 39 歳男性のダウン症で、通所歴 16 年、障害支援区分 6、療育手帳 A であった。2 語文で簡単な挨拶や要求はあったが、機能的言語は乏しかった。一日中、大声を出す、口笛を吹く行動が見られた。P2 は 18 歳男性の點頭てんかん（ウェスト症候群）を伴う知的障害で、通所歴 1 年、区分 5、療育手帳 A であった。無発語で職員とのやりとりが困難であった。他者の腕をつかむ、他者を叩く等の行動障害が頻繁で激しく、個別支援が必要であった。【倫理的配慮】施設長、担当職員に研究目的や方法、個人情報等の守秘義務の遵守等を明記した文書を用いて研究協力を依頼した。施設を通じて参加者の保護者にも同意を得た。所属大学の研究倫理審査委員会の承認を得た。【期間・場所・研究者の役割】期間は X 年 4 月～X+1 年 2 月で、介入場所と活動は施設内の居室で午前中に行われる自立課題であった。第一著者は、週 2～3 回のペースで訪問し、参加者や自立課題のアセスメント、介入での支援補助を行った。【自立課題と担当職員】P1 の自立課題はチラシを 1 枚ずつ手回しシュレッダーに入れる課題であった。居室には 2 名の職員が日替わりで担当していた。P2 は 4 種類のプットイン課題であった。1 名の職員が P2 への個別支援を日替わりで、その他に 1～2 名の職員が居室内の支援を日替わりで担当していた。【行動障害の FA】①動機づけアセスメント尺度（MAS）、②機能的アセスメントインタビュー（FAI）、③直接観察による ABC 分析の順で、職員への負担を配慮しながら実施した。これらの結果、P1 の大声を出す、口笛を吹く行動は、感覚刺激の獲得と注目の獲得機能が推定された。P2 の他者の腕をつかむ、他者を叩くは、感覚刺激の獲得、嫌悪事態からの逃避機能が推定された。競合行動バイパスモデルにもとづく介入方略を立案して職員に提案し、立案した支援は全て実行可能であると職員の合意を得た。【手続き】BL 期：普段どおりの手続きで自立課題を実施した。活動の流れは、始めの挨拶、準備、自立課題の実施、終わりの挨拶、片付けであった。介入期：自立課題の直前に職員が支援マニュアルを参照し、支援を実行した。支援マニュアルには、介入方略にもとづく課題手順や P1、P2 への声かけ等の方法を記載し、透明ケースに入れて職員の動線にある壁に掛けた。P1 の自立課題は、チラシの枚数を 5 枚（1 セット）に変更した。P2 は、選択ボードを導入し、新たに 2 種類の課題を増やし 6 課題（1 セット）で実施した。フォローアップ期：介入後の 2 か月あとの、標的行動の生起を確認

した。【標的行動と評価】P1 の行動障害では大声を出す、口笛を吹く、課題遂行ではチラシを手回しシュレッダーに入れてハンドルを回す行動を標的とした。P2 では他者の腕をつかむ、他者を叩く、課題を選択し箱に玉などを入れる行動を標的とした。タイムサンプリングとインターバルレコーディング法を用いて、行動障害と課題遂行の生じた割合、課題時間に遂行した 1 分あたりの課題数を評価した。

【結果及び考察】Fig.1 より、P1 の大声を出す、口笛を吹く行動の割合は、BL～フォローアップ期で変化しなかった。課題遂行の割合と課題数は介入期で増加し、フォローアップ期で減少した。Fig.2 より、P2 の腕をつかむ行動は介入期で減少した。他者を叩く行動は BL～フォローアップ期を通じて非生起であった。課題遂行の割合と課題数は介入期で増加した。P1 の担当職員は BL 期 8 名、介入期 7 名であった。P2 の担当職員は BL 期 5 名、介入期 6 名であった。P1、P2 ともに、介入期で課題遂行の割合や課題数が増加した要因として、競合行動バイパスモデルにもとづく介入方略が妥当であったこと、職員が入れ替わっても支援マニュアルの活用により支援が実行されたことが考えられる。フォローアップ期で介入期よりも減少したのは、同じ自立課題を繰り返し遂行することで課題への飽きや慣れが生じたと推測され、課題内容や支援マニュアルを適宜修正する必要があったと考えられる。

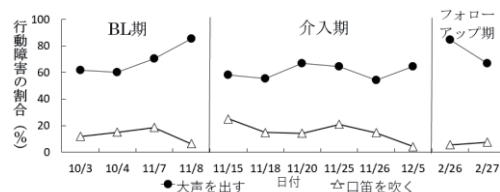


Fig. 1 P1の行動障害、課題遂行、課題数

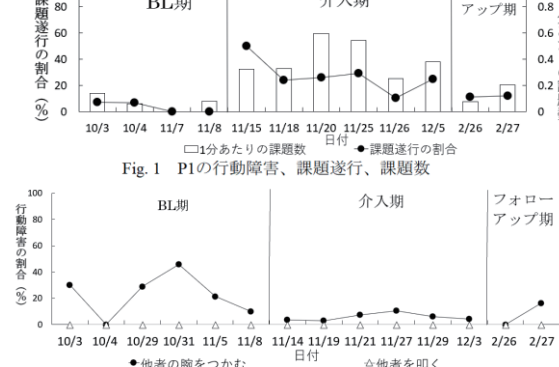


Fig. 2 P2の行動障害、課題遂行、課題数

【文献】野口昇子（2008）発達障害研究，30，352-361。服巻 繁・野口幸弘・小林重雄（2000）特殊教育学研究，37，35-43。（KUBOTA Masaki, MURANAKA Tomohiko）